共生委員会ニュース

ともしび

2022年11月 第2号

共生･探究学習委員会



被災した宮古市「たろう観光ホテル」（震災遺構）

平和共生論文　クラス代表論文

HR301　S.A.
「中･高等学校におけるジェンダー教育の必要性　日本の将来は教育現場にかかっている」

HR302　S.R.
「プラスチックというものに持続可能性はあるのか」

HR303　S.R.
「動物愛護という流行　動物神話･哲学論争における動物観の表象から探る」

HR304　Y.Y.
「新必修科目「地理総合」と国際理解　ー地理総合を糧に多文化社会をどう生きるかー」

HR305　N.A.
「女性の社会進出への課題　―マミートラックから読み解くー」

HR306　H.Y.
「東北被災地の復興支援活動を見つめる　ー風評払拭と被災者の豊かな暮らしを目指してー」

HR307　S.T.
「遺伝子操作によって生まれる子どもは幸せになれるのか」

HR308　N.R.
「学生はメンタルヘルスとどのように向き合うべきか　～ストレス社会に生きる若者の声～」

HR309　S.Y.
「コロナ禍で明らかになった宗教の諸問題と変革」

HR310　I.H.
「日本における同性婚の可能性」

宮古訪問プログラム報告

３年　N.M.

宮古訪問プログラムは今年、２泊３日で岩手県宮古市を訪問しました。

１日目は、まず「学ぶ防災」で、東日本大震災の当時の様子を知る方のお話を伺いました。東日本大震災の避難の時に妨げとなった要因として正常性バイアス、集団同調性バイアス、エキスパート・エラーの主に３つがあげられるそうです。正常性バイアスとは予期しない事態にあったとき、「そんなことはありえない」といった先入観や偏見を働かせて事態は正常の範囲だと自動的に認識するシステムのことです。津波があの巨大な堤防を超えるはずがないと思い込んで、避難警報が発令されているにも関わらず、避難しなくても安全だと考えてしまいます。集団同調性バイアスとは、周りの人と同じ行動をとることが安全だと考える心の働きのことです。避難所ではない場所を避難所だと勘違いしてしまい、集まった大勢の人の命が奪われました。エキスパート・エラーとは、専門家の意見や公的機関の見解が必ずしも正しいとは限らないことです。津波の浸水区域でないとハザードマップに書かれていても、浸水する可能性は十分にあるそうです。この後、田老観光ホテルに行って、ここでしか見られない津波の映像を見ました。津波に家や車などすべてのものが飲み込まれていく様子に、胸が痛くなると同時に、当時の様子をよりリアルに感じることができました。

２日目は、岩手県立宮古北高校の生徒会と、教職員の方々と交流しました。たわいもないおしゃべりをして仲を深めた後に、「もし自分がスーパーの店長で、地震が起きた場合、どのような行動をするべきか」を分刻みで考えました。その時に用いた MM(Map Maneuver)手法というのは、スーパー見取り図と津波ハザードマップを使って、店長として取るべき行動をシミュレーションするというものでした。話し合いの中で、宮北の方々が震災当時の写真を見て、「ああ、これはだれだれさんの家だね」と会話していて、驚きの反面、自分と背負っているものの大きさの違いを実感しました。また、彼らにとって東日本大震災は歴史の一部ではなく、身近に起こった出来事であり、自分ごととして捉えているのだと感じました。

３日目は、宮古市役所で山本市長と面会し、インタビューさせていただきました。山本市長は、「すまいと暮らしの再建」、「産業・経済復興」、「安全な地域作り」の３つを宮古市東日本大震災復興計画に掲げ、取り組まれている方で、復興に対する考え方を学びました。



３日間を通して、宮古の自然豊かで、涼しく過ごしやすい気候の中で、美味しい海鮮を味わったり、人の温かさを感じたりしました。リアス式海岸で津波の被害を受けやすい地域ではあるけれど、それでも人々が住み続けているのは宮古がとても魅力にあふれる土地だからだと思います。地域の方々はこのような自然と調和して生きるんだという前向きな考え方を持っていて素晴らしいと思いました。私達も、インスタントではなくコンスタントに復興に携わっていきたいです。

フィリピンプログラムのクラスルーム開設について

コロナ禍でフィリピン訪問プログラムは実施できませんが、
フィリピンについてもっと知りたいという人に向けて、
クラスルームを開設します。ぜひ入ってみてください。

登録用クラスコード

グローバルウィーク　生徒礼拝Ⅰ

3年　T.R.

みなさんは貧困と聞いて何を思い浮かべますか？食べ物がない、着る服がない、教育を受けることができないなど様々なイメージがあると思いますが、生理の貧困について考えたことはありますか？ユニセフの調査によると、コロナウイルスによって経済的打撃を受けた現在、13歳から35歳の女性の4人に1人が生理用品を買うのに苦労しています。私がこの問題に取り組もうと思ったきっかけは、アメリカでボランティアをやっていた際、生活補助を受けている女性に会ったことです。彼女は生理用品を持っていなかったので、私にくれないかと言ってきました。金銭や、食べ物ではなく、一般的ではない生理用品を頼んできたことに私は大変驚きました。生理用品が家にあることが当たり前の生活を送ってきたので、とても衝撃を受けたとともに、この問題について深く調べるようになりました。

調べていくうちに、生理の貧困は女性に驚くほど多くの影響を与えていることがわかりました。まずは生理用品がないために、学校にいけないことです。特に発展途上国ではその結果、成績を維持することが難しくなり、中退せざるを得ない人が沢山います。そのような国では、十分な教育を受けられなかったことから女性の就職率も低くなってしまっています。また、経済的負担を減らす為、生理用品を交換する頻度を減らすほか、トイレットペーパーやティッシュなどの生理用品ではないもので代用している女性もいます。発展途上国に住んでいる女性の中には草や布を代用している人もおり、感染症のリスクが高まる為、決して衛生的とは言えません。生理の貧困とは経済的な理由からだけではありません。生理に対して根強い偏見のある国では、生理期間中に隔離されてしまったり、人前に出ることを許されないこともあります。これらの問題はSDGsの目標1「貧困を無くそう」、3「すべての人に健康と福祉を」、4「質の高い教育をみんなに」、5「ジェンダー平等を実現しよう」に直接的な関係があり、私はこの問題に取り組むことによって、SDGsの全体的な目標達成にも近づくことができると考えています。

今までは助けたいという思いだけで行動に移していなかったけれども、調べていくうちに見て見ぬふりはできないという気持ちへと変わり、この夏にパキスタンに生理用品を届けるプロジェクトを始めました。パキスタンを選んだ理由としては、この国は貧困、迷信、宗教上の理由などにより、生理に対するタブー視が特にひどく、親の経済状況に関係なくても、生理用品を手に入れることが難しいということを知ったからです。また、49%の人が生理の存在を知らずに初経を迎えてしまっていることから、生理に対する知識や教育の不十分さがわかります。残念ながら、パキスタンではこの夏に、台風の影響によって大洪水も起きてしまい、国土の3分の1が水没してしまうニュースはみなさんも耳にしたことがあると思います。この悲惨な現状によって、ますます多くの女性が衛生的で快適な生理用品を必要としています。まだ始めたばかりのプロジェクトのため、信頼性や実績の欠如から、多くの壁に直面し、自分から始めたにもかかわらず、そのまましばらく手を付けられない時期がありました。そんなとき、このプロジェクトのメンバーであるパキスタンの人に、現地では状況が悪化し、迅速なサポートが必要なため、急いで欲しいと言われました。パキスタンでは毎日を一生懸命に生きている人がいるのに、その大変さから目を背け、先延ばしにしてしまっていた自分に不甲斐なさを痛感したと共に、高校生の私にも必要とされていて、できることがあるのだというこのプロジェクトに対する存在価値を認識することができました。

今日読んでいただいた聖書箇所「もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう」にもある通り、パキスタンの人を助けたいという思いだけで、行動に移さない限り、結局は何もしていないことと同じで無力なのだと実感しました。「世界を変えるには、まず半径5メートル以内で行動を起こすべきだ。」という言葉を聞いたことがあります。最初は1人で始めたプロジェクトですが、同じような関心を持った世界中の高校生や大学生から賛同をいただき、今では企業から支援をしていただけるまで、規模を大きくすることができました。現在は、日本人と海外の方向けに二つのクラウドファンディングを作り、募金を集めています。現在の目標はクラウドファンディングや生理用品の寄付を通して、今年中にパキスタンの「サライキ ワサイブ」という町に500個の生理ショーツを届けることです。また今後はパキスタンの他の町にも支援ができるまで規模を拡大することを目標としています。

私には恐怖や不安と隣り合わせで過ごしているパキスタンの女性の気持ちは心の奥底からは理解できませんが、同じ女性として、この活動を通し1人でも多くの女性たちの生理期間を快適にできればと思っています。そして、それが女性進出の第一歩になることを信じてこの活動を続けていきたいと思います。

グローバルウィーク　生徒礼拝Ⅱ

2年 I.H.

自分は生まれてすぐ、幼児洗礼を受けました。そのため小さい頃から教会に通ったり、また幼稚園から青山学院に通っていたので、自分にとって、キリスト教というものはとても身近なものであったと言えるでしょう。

そんな自分は去年の 8 月 30 日に交換留学生の制度を利用して、アメリカに留学をしました。ミズーリ州にあるシェルダンという町で約 1 年間過ごしました。この町は簡単に言えば田舎で、あたりを見渡して見えるものと言えば基本牧草地か隣人の家でした。ステイ先のホストファーザーは副業として畜産も営んでいたのでよく彼の農場にいって手伝いをしていました。ほぼ毎日手伝いをやっていたので、もちろん育てている家畜に愛着が湧いてくるものです。ですが、家畜が大きく育つと食糧のために自分たちは彼らを屠殺しなければなりません。甘い環境で育った自分にとってはもちろん簡単なことではありませんでした。細かくこの出来事を語ると長くなってしまうし、具合の悪くなる人が少なからずいるはずなので言いませんが、殺す瞬間はとても罪悪感が溢れることでした。グロテスクであったとか、可哀想であったとかという問題ではなくて、この自分が命を奪ったという問題でした。気持ちとしてはマイナスな面が強く出たものの、もちろんその分学びがありました。それは命の重さを知ったということです。これは至極当たり前のことですが、正直人生の中でしっかりと意識をしてきたことはありませんでした。もちろんきっかけがなかった訳ではありません。学校では食前に感謝の祈りを捧げていたし、親からは、自分が何か食べ物を残そうとするたびに、命を無駄にするなと口酸っぱく言われてきました。ですがこのような言葉は自分の性格も相まって 15 年間、あまり心に刺さりませんでした。が、自分は沢山の命の上に成り立っているという常識的なことをこの経験を通してやっと深く考えることができました。

自分が通っていた教会では、ボランティア活動が活発でした。ホストファーザーが農家でありながらも牧師で、自分はその子供という立場であったので、半強制的に参加をしていました。その中に、ホームレスの方々に食事を提供するという活動がありました。ホームレス収容所の中の一つを訪問をし、食事を配膳するという内容でした。そこには様々な人がいました。ドラッグ中毒になってしまった人、人種差別をされて職を持てない人、生まれながら脳や身体にハンディキャップのある人など沢山の異なった理由から貧困になってしまったひとがいました。彼らの服はボロボロですし、髪の毛の状態はシャワーを何日、何週間も浴びれていなかったことがすぐに分かるほどでした。手首に自傷行為の跡が残っている人もいました。彼らはどのような苦悩を何年続けてきたのか、甘い環境で育った自分の想像とは程遠いものなのでしょう。収容所の礼拝堂では、ほぼ全員の人が礼拝を捧げていました。こんな苦しい時でも礼拝をする信仰心に感心するとかではなく、単純に今神様にすがることしかできない、というまでの窮地に立たされているのだろう、と思いました。その方々全員が食事をもらった時にありがとうと自分にお礼を言っていたのですが、まるで初めて聞く言葉のようでした。その食事は自分にとっては当たり前のことですが、彼らにとってはそうではないのです。そこからくるありがとうのたった一言にとてつもない重みを感じました。

このように世界の貧困問題というものは深刻なのです。現在世界で十分な食事が取れない人は 8 億四千万人もいるとされています。人が殺す命というものは、自分自身のものではなく、神様に属しているものである。それは人間でも、例え動物であっても変わることはない。そういうふうに考えると、軽率に食べ物を捨てるということは実質二つの命、つまり人間と動物の両方の命を捨てているということと同じではないのか。自分はそういうふうに思います。食を無駄にする一つの例として食品ロスが挙げられます。食品ロスとは簡単にいうと、まだ食べられるのに廃棄されてしまう食品のことです。先進国でよく起こることで、例えば、賞味期限ギリギリのものを売れなさそうだから、少しだけ商品に傷が見えるからという些細なことで廃棄をすることです。もちろん、これはコンビニエンスストアなどのお店に限ったことではなく、家庭内でも頻繁に起きています。これが原因で富裕層だけ過剰に食を得て、貧困層は飢餓に苦しむ、となると考えられます。

きっとここにいる人ほとんどが比較的豊かな人々だと思うのですが、そういった人は食事が取れることに満足感を感じ、そこから来るありがたみを感じることはあると思いますが、どこかでそれが当たり前であると思っているのではないかと自分は思います。だから、あまり抵抗もなく食品を捨ててしまうのではないかと思いました。実際には、その当たり前というものは、沢山の命と貧困な人を土台にして成り立っていると言っても過言ではありません。そのことを理解できるかどうかが、加速していく貧困問題と食品の分配の解決の鍵となると、自分は強く信じています。